

快適なトイレと公共性からみた課題

山本耕平

(株)ダイナックス都市環境研究所代表取締役会長、一般社団法人日本トイレ協会運営委員

1955 年兵庫県生まれ。早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。1984 年株式会社ダイナックス都市環境研究所設立。廃棄物・環境政策、地方自治、防災などの分野で調査研究、コンサルタント業務を行っている。1984 年日本トイレ協会設立。著書に「まちづくりにはトイレが大事」(北斗出版)、「トイレがつくるユニバーサルなまち」(イマジン出版)、「災害とトイレ」、「SDGs とトイレ」(日本トイレ協会編・編集代表、柏書房)等

1. 進化する日本のトイレ

新型コロナ禍をようやく脱して、再び外国人観光客が増えてきた。日本には外国人を魅了するさまざまな観光資源があるが、もうひとつの魅力は「おもてなし」であろう。その象徴がトイレである。東京オリンピック・パラリンピックは、トイレの進化を促すきっかけとなった。渋谷区では日本財団などの協力で「The TOKYO Toilet」というプロジェクトが進行中で、日本中の著名な建築家の設計で、17 の屋外公共トイレがつくられた。



The TOKYO Toilet – 透明な建物で有名になった坂茂氏設計のトイレ(渋谷区代々木深町小公園トイレ)

日本のトイレが快適な理由はハード面だけではない。何よりも社会全体が安全であるから、安心してトイレを使うことができる。もっとも最近ではトイレでの犯罪や不適切な利用がニュースになることもあるが、少なくとも海外よりはるかに安全だ。また利用者のマナー、清掃やメンテナンスが行き届いていること等、いろいろな要素が相乗して快適なトイレを実現しているといえる。

2. トイレ改革の先鞭をつけた公衆トイレ改革

洋式、水洗トイレが当たり前になったのは 20 年くらい前のことで、下水道処理人口普及率が 5 割を超えたのは平成 6 年、温水洗浄便座は平成 17 年である。それ以前のトイレは和式で、汲取りで、特に駅や公衆トイレは「汚い・暗い・くさい・怖い」の 4K といわれていた。

そこで筆者らは 1984 年に「トイレットピアの会」を立ち上げて、トイレの改善を議論す

る場をつくった。様々な専門家、官僚、エンジニア、大手機器メーカーの社長まで、産官学民のトイレに一家言持つメンバーが、きわめて真面目にトイレを語り合い、それを肴に飲むという会だ。好事家のネタではなく、トイレを社会問題として取り上げた活動は珍しく、海外も含めて様々なメディアで報道された。その反響の大きさに後押しされ、1985年には「日本トイレ協会」を設立した。（初代会長は当時大田区立郷土博物館館長の西岡秀雄慶大名誉教授。）

日本トイレ協会は、全国の優れた公衆トイレを「グッドトイレ 10」として顕彰したり、全国で「トイレシンポジウム」を開催し、社会的な観点からトイレについての様々な問題を議論してきた。こうした活動が火付け役となり、全国の自治体が競って公衆トイレの改善に取り組み始めた。このような自治体の先進的な取り組みが、トイレ改革の先鞭をつけた。

デパートなどの商業施設ではトイレが集客の手段になり、従業員がトイレ清掃や維持管理に参加する仕組みを取り入れたところもある。

JRは国鉄時代に不評を買っていた駅のトイレ改善を、民営化の象徴として着手した。JR東日本は山手線の駅から順次改築を進めた。新橋駅や横浜駅では「チップ式トイレ」を導入するなど、まったく新しい試みも行われた。

2005年に道路関係四公団が民営化され、高速道路のトイレも世界のトップクラスになっている。道路に快適なトイレと休憩施設が整っている国は、日本以外にはない。

高速道路に先駆けて一般道に「道の駅」ができた。現在では全国に1200以上もある。道の駅は一般道にトイレがないのは、観光客や高齢者にとって不便であるという議論から生まれたものだ。1990年に筆者も参加していたまちづくりの交流会で提案し、93年に当時の建設省が登録制度をつくった。道の駅の要件は「24時間使えるトイレがあること」、附帯施設として休憩施設や道路情報などを発信する機能があることで、物販施設が道の駅ではない。要するに道の駅とは一般道の公共トイレなのである。

4. トイレをタブーとしない文化

排泄やトイレのことをあまりタブーとしないことも、日本の特徴かもしれない。海外の人たちとも交流してきたが、だいたいどこの国の人もそのような感想を述べる。トイレの呼称は、便所、厠、雪隠、手水、御不浄、閑所（かんじょ）、東司（とうす）など数え切れないくらいある。憚（はばかり）というのもあるので、昔はあまり人前で口に出すことはタブーだったかもしれないが、現在ではおおっぴらにトイレを語ることをはばかりの雰囲気はない。

また日本ではトイレにも芸術、アートを見ることができる。E.S.モースは「日本人の住まい」の一節に「便所といえども、日本家屋では、芸術的感性のある日本の職人はこれに注意を払っている」と書き、造作の材料から意匠まで、感嘆をもって記述している。また江戸の町が清潔だったのは、屎尿の汲み取りを「生業」とする人たちがいたからだと述べている。現在では空港でも高速道路でも鉄道でも、「メンテナンスワーカー」が技能を磨いて清潔を競っている。だから外国人はみんな感心するのである。

陶磁器製の便器が生産されるようになったのは明治時代で、明治初期に藍色の絵付けを

した便器（染付便器）が登場した。江戸時代から藍色は清潔でお洒落、粋の象徴とされ、藍染めの着物や藍色の絵付けの食器が普及していたので、便器にも藍色の花鳥図などが描かれるようになった。これもすばらしい芸術作品である。

しかし残念なことに、日本のトイレの歴史や文化を伝える場所がない。平成9年に大田区立郷土博物館が企画展「考古学トイレ考」、平成16年には葛飾区郷土博物館が「肥やしのチカラ」という企画展を開催し大勢の見学者が詰めかけた。西岡先生は「トイレ学」を提唱されたが、学際的なトイレ研究とトイレの常設博物館ができることを念願している。

5. トイレの公共性とこれからの課題

日本のトイレは快適だという前提で本稿を書いてきたが、まだまだ課題は多い。公共施設でも整備が進んでいる「バリアフリートイレ」（国土交通省はこれまで多機能トイレと呼んでいたトイレの呼称をバリアフリートイレに統一した）も様々な課題が指摘されている。

バリアフリー法（高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律）によって、建築物や交通機関のバリアフリー化が定められ、バリアフリートイレの設備等についても一定の基準が設けられている。バリアフリートイレはもともと利用頻度が低い車イス用のトイレ（ブースの面積が広い）をユニバーサルなトイレ（すなわち多様な人が使える多機能なトイレ）としたものだが、一つのブースにさまざまな機能を詰め込んだために利用者が増えて、車イス利用者が混み合っただけで使えない等の問題が生じている。

そこで詰め込んだ機能をトイレ全体に分散して設置することで、バリアフリートイレの混雑を緩和しようという案がある。外見は健常者に見えてもオストメイト（人工肛門などの造設者）などの障害を持つ人もいるし、ベビーカーの乳幼児を連れた人も一般のブースは使にくい。せっかくのユニバーサルなトイレをうまくシェアして利用する仕組みが欠かせなくなっている。

また性的マイノリティの利便の観点から、男女共用のジェンダーレストイレをつくるべしという意見がある。これに対して女性の安全という視点から強い反対意見もある。このようにトイレに対するニーズは多様で、トイレがよくなればなるほどきめ細かな対応が求められるようになってきている。すべての人が満足できるようなトイレ環境を整えることは難しいが、トイレの公共性という視点からさらなる「進化」が期待される。



国土交通省のポスター。多機能トイレの使用を控えるよう訴えている。